

〈善く生きる〉ための社会学の系譜 ～スラヴ地域からの亡命知識人が残した遺産と展望～*

吉野浩司** 吉田耕平*** 磯直樹**** 梅村麦生*****

The History of Sociology for “Good Life”
: Heritage and Outlook that Exile-intellectuals in Slavic Region Has Left
Koji YOSHINO **, Kohei YOSHIDA ***, Naoki ISO ****, Mugio UMEMURA *****

はじめに

本稿の筆者4人は、2019年度から「〈善く生きる〉ための社会学 研究会」を開催している。これはスラヴ地域からの亡命知識人に注目し、1870年頃から1960年頃までの人文・社会科学の歴史を再検討しようとするものである。

その第一段階では、関連文献の吟味と研究領域の確定、そして作業内容の策定を行った。これによって、おおよそ次のような共同研究の骨格が得られた。

1. 目指すべき地点

どうすれば〈善く生きる〉ことが出来るのかを考える社会学を構想する。これまでの多くの社会学者が取り組んできた、物質や身体にかかわる社会学、すなわちソーマ (σώμα) の社会学ではなく、それに代わるプシュケー (ψυχή) の社会学を志向するものである。

2. スラヴ地域からの接近

19世紀後半、ロシアに現れた社会思想の特色、それらの発展を再構成する。

3. 亡命知識人史・再考

スラヴ地域内、およびその外側に身を置いた亡命知識人たちの足跡をたどる。

4. 深めるべき論点

〈善く生きる〉とはどういうことなのかを改めて問い直すことで、生身の人々の生活に欠けているもの、実現すべきものを提示する。

本稿では、これらの内容を概観する。これを通じて、今後、〈善く生きる〉ための社会学の姿を素描していく際の課題を示したい。

〈善く生きる〉とは、どういう生き方なのか。そのことを人間一人ひとりが考え、その生き方を目指していくための足掛かりを提供すること、言い換えると善く生きられる社会を作ることがこのプロジェクトの究極的な課題となる。

第1章 目指すべき地点

第1節 善く生きるとは「魂の世話」をすること

人には人それぞれの生き方がある。だとすると、善い生き方を一義的に定めることなどできないのではないか。そういう見方もあるだろう。ただここで念頭に置いているのは、古代ギリシャ哲学より語られてきた〈善く生きる (ト・エウ・ゼー = τὸ εὖ ζῆν)〉というテーマである¹。『クリトン』の中でプラトン (Πλάτων = Plato, BC427-BC347) がソクラテス (Σωκράτους = Socrates, BC469-BC399) に語らせた、次の有名な一文にそれは由来している。「ただ生きることではなく、善く生きることこそ、何よりも大切にしなければならない」(48B)。

しかし、これだけでも、まだ何も語ったことにはならないだろう。ただ生きるのではないような生き方とは、いったいどのような生き方なのか、いまひとつ判然としないからである。プラトンはまた『ソクラテスの弁明』において、次のようにも言っている。「金や評判・名誉のことにばかりに汲々として、恥ずかしくないのか。知と真実のことには、そして魂をできるだけ優れたものにするには無関心で、心に向けようとはしないのか」(29D-E) と。

一般には、所得が増え、社会的地位が上昇する

* Received November 5, 2020

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 教授

*** 東京都立大学 人文科学研究科 客員研究員

**** 慶應義塾大学 法学部 (三田) 特別研究員

***** 日本大学 文理学部 助手

ことに生きがいを感じる人が多い。金銭面や地位や名誉といった面での向上は、目に見える形で自他に示される。そのことに対して、あたかも善く生きているかのごとき充実感を味わうことは、ごく普通の感情であるには違いない。しかしそのことは、プラトンのいう〈善く生きる〉こととは、鋭く対立することがこの文章からもわかるだろう。

収入や評判や名誉といった、わが身を着飾るための虚栄と虚飾に汲々として生きること、プラトンの言葉でいうとソーマ（物質・身体）のことにばかりを気に掛けて生きること、そのような生き方は、実は、ただ生きているに過ぎない。絶えず体のこと物質のことにのみ興味関心を注いで生きている生き方である。

〈善く生きる〉とはそういうことではない。知（ソフィア＝σοφία）や魂（プシュケー）といったものと真剣に向き合って生きることが、〈善く生きる〉ことに他ならない。そうした生き方は、時として自らの命を縮めたり、生活水準を低めたりする場合さえないとはいえない。しかし、そうしたことさえも、あえて引き受けることが、ここでいうところの〈善く生きる〉ことの真意である。

「吟味を受けない生は、人間の生きる生ではない」（29D-E）。それがプラトンの提言である。そうではなく、知や魂がある種の憧憬を抱いている対象と仮定されている、真・善・美といったものを、繰り返し反省的にとらえなおす作業のこと、それがプラトンのいう「魂の世話（ἐπιμέλεια τῆς ψυχῆς）」であった。人は魂の世話をすることによって、ようやく〈善く生きる〉ことができるのである。

このプラトンが説いた〈善く生きる〉ための思想が、いったいどのような形で社会学の中に導入

されてきたのか。それは、これまで語られることの少なかった、ロシアおよびスラヴ地域の社会学史を紐解いていくことで、ようやく明らかになっていくことがらである²。

以下では、本研究で取り組んでいく課題を順に論じてみたい。

第2節 起点としてのロシア・プラトニズム

ロシア語訳プラトン著作集が出されるのは、1840年代に入ってからのものである。それはロシア正教の神学者の手になる翻訳であった。そのこの意味は、深く考えておく必要がある（下里、2008）。第一にそれは、ギリシャ哲学から西欧のカトリックによって補強された思想（トマス主義）の展開とは別の系譜を示すことにあった。すなわち東方正教会という、ギリシャ由来のキリスト教の継承者としてのロシアの自己規定である。そこではアリストテレスが否定したプラトンのイデア論、さらにはその神秘主義化といわれる流出論さえもが、再評価されることとなった。

さらに第二に、アリストテレスは西洋のルネサンスに寄与した、しかしプラトンはロシアのルネサンスに寄与するのではないかという期待である。よくいわれるように、アリストテレスは物質的なもの、すなわちソーマを重んじた。西洋ルネサンスは、そのアリストテレスへの再解釈から始まったという側面をもっている。言い換えると、ソーマを重視することで、西洋は物質や科学技術の面での発展に大きく貢献した。それに対し、プラトンはイデアとプシュケーを重視する。これは、物質的な豊かさではなく、精神的な幸福が期待されたからに他ならない。そうした見方が、ロシア・プラトン主義の根底にある。

¹ ギリシャ哲学においては、「善」とは何か、「生（生きる）」とは何かということも、当然、大きな問題となってくるであろうが、ここでは「善く生きる」という語を、1つの成句としてあつかう（藤沢、2000；岩田、1985）。

² もちろん、従来の社会学がプシュケーや〈善く生きる〉という問題をまったく扱ってこなかったというわけではない。社会学の淵源はイギリスやフランスにおいては道徳哲学に、またドイツにおいては精神科学にあると言われ（cf. Sombart 1923）、さらにアメリカにおいては少なくともその一端が「社会福音運動」や「キリスト教社会学」に始まると言われたように（cf. Hopflins 1940=1979；宇賀 1971：89-90）、当初から精神的なものがその首座にあったとさえ言える。ただし、その「精神的なもの」をどう扱うかに関して言えば、社会学の古典的な代表者たち以来、社会学と社会政策の区別、社会学と社会哲学や社会倫理学との違いが訴えられ、そして社会学のディシプリンとしての確立や専門分化、制度化が進んでいく中で、「魂の世話」や〈善く生きる〉ことをめぐる問いが背景に退いていったこともまた事実である。

第三に、オスマン・トルコ支配下のコンスタンティノープルとの対抗意識もあった。コンスタンティノープルはかつてのビザンティウム、東ローマ帝国の首都であり、現在、トルコの首都イスタンブールが置かれているところである。ここには現在でも東方正教会の総主教庁が置かれている。東方正教会をロシアの力で再建し、イスラーム帝国に対抗しようという意図がそこにはあった。

こうした重層的な意味を持つプラトンの哲学は、翻訳の出版の甲斐あり、1850年代から60年代にかけてのロシアの思想家や文芸批評家の間に、急速に広まっていった。その影響は、ピサレフ（Дмитрий Иванович Писарев, 1840-1868）やミハイロフスキー（Николай Константинович Михайловский, 1842-1904）の主観主義社会学に大きな影響を与えることとなった（Nethercott, 2000）。

第3節 到達点としての「利他主義、道徳性、社会連帯」部会（AMSS）とその先へ

では、〈善く生きる〉ための社会学は、現在どのような形で展開されているのだろうか。これに関して参考となるのが、アメリカ社会学会に設けられた「利他主義、道徳性、社会連帯」部会の設立趣意書³と、それに依拠したハンドブックの出版である。『パルグレイヴ・ハンドブック利他主義、道徳性、社会的連帯——研究分野の組織化』が、同部会の主要なメンバーたちによって2014年に出版された（Jeffries ed., 2014）。部会のテーマとなっているトピックも、利他的パーソナリティの分析、戦争と紛争の解決策の探求、グローバルな社会運動、NPOやNGOによる社会問題の解決、ジェンダーやボランティアなど、実に多様である。

この多様なテーマを持つ部会の統一した課題の1つは、「利他主義、道徳性、社会連帯」（以下「利他主義等」と略記）に関する学説の起源、ならびに社会における「利他主義等」の役割を解明することである。この説明において、同部会のリーダーは「目的の感覚」、つまり科学的情報の応用が重要であると示唆する。

この分野の主題は、〔・・・〕目的の感覚（A sense of purpose）を伴う。〔・・・〕利他主義、道徳性、社会連帯〔への希求〕をよりいっそう表明できるような筋道について、適切な科学的情報が得られれば、これは個人の生（the lives of individuals）を豊かにするだろう。それは一般社会の共通善（the common good）にも寄与するだろう。

（Jeffries, 2014: 7）

個人の生を豊かにし、集団生活の中に共通善というものを見出そう、そういう意図で書かれている。現代社会学の中で〈善く生きる〉ことを真摯に考え、それを社会に実現しようとしている、たぐいまれな試みであるといえる。しかし残念なことに、同部会の個々の研究を見る限り、「利他主義等」の社会学は、一般社会の共通善に寄与するような回路を示すことができていないと思われる。確かに宗教的利他主義の例をみると、相互扶助から焼身抗議までの実に豊富な利他主義のあり方が示されている（Lee, 2014）。これは「利他主義」の概念の広さ、および現代世界における重要性を物語るものである。しかし、これらをひとたび、利他主義という1つの概念でくくろうとする場合には、どうしても無理が出てくる。NPOによる相互扶助的セルフヘルプ・グループの「助け合い」と、宗教弾圧に対する抗議としての「焼身行為」は、はたしてひとくくりにできるのだろうか。また仮にできたとしても、そうした利他主義とされる全ての行為を、〈善く生きる〉スタイルとして、社会に対し推奨することはできるのだろうか。

同部会において探究する「利他主義等」の学説の起源についても、こうした問題点は残るように見受けられる。はたして、ソローキンを始めとする先行者たちは、「利他主義等」の役割を探究しただけなのか。これに関する知識の獲得を通じて、一般の人々の間に「利他主義等」を具現させるような試みは存在しなかったのか。こうした一連の問いに取り組むことによって、人々が〈善く生きる〉ための社会学のあり方を考察できると考

³ 趣意書にはソローキン（Pitirim A. Sorokin, 1889-1968）やデュルケーム Emile Durkheim, 1858-1917）やジェーン・アダムズ Jane Addams, 1860-1935）らが、利他主義研究分野の創始者であるとされている（Jeffries, 2014 4）。また本節については（吉野, 2020, 16-32頁）を参照のこと。

えている。

そこで本研究では、現存する文献を頼りに、次のことを明らかにしていきたいと考えている。すなわち、プラトンに依拠して〈善く生きる〉ための社会学を最初に構想したのが、1860年代のロシア思想であった。それらは幾人もの手を伝って現代の利他主義部会にまで影響を与えている。その主な伝達者は、スラヴ地域からの亡命知識人であった。今はまだその全容は不明である。そのため利他主義研究は社会学および関連科学の中では、孤立しているように見える。だがこの部会の来歴をさかのぼって、亡命知識人の思い描いた社会学を再構成することで、〈善く生きる〉ための社会学の全容は解明できるであろう。

スラヴ地域からの亡命知識人の遺産を、本研究の課題に定めたのはそのためである。対象となるのは、狭義の社会学ではあるが、探索においては、社会学だけでなく、広く「一般的社会思想」(Hughes, 1958) までを視野に入れる。加えて、事実解明の面では、人文・社会科学を含めた亡命知識人の歴史研究を参照することになる。

第2章 スラヴ地域からの接近

第1節 知識人と亡命の素地

ここで問題となるのが、「スラヴ」の範囲、そして「知識人 (インテリゲンツィヤ)」の性質である⁴。

「スラヴ地域」という言葉は、一般に、「スラヴ民族」が暮らす広大な領域を指すと考えられる。ただし、「スラヴ民族」の定義や、その分布の確

定は容易でない⁵。

「スラヴ世界」という言葉もしばしば使われる。これはスラヴ系の言語を使用する言語圏を指す場合もあれば、それ以外の地域も含めて、広く現在のロシア連邦全域から旧ユーゴスラヴィアまでの文化圏を指す場合もある⁶。

これらの語彙に含まれる国と地域は、おおむね次のように整理できるだろう。

- ①スラヴ語派の言語を主として使用する人々の居住地域。現在の国家では、ロシア連邦（ヨーロッパ部分）のほか、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランドから、チェコ、スロヴァキア、クロアチア、セルビア、ブルガリアまで、様々な国が挙げられる。
- ②スラヴ語派の言語を使用する人は少ないが、政治的または文化的に上記①と関わりが深い地域。フィンランド（フィンランド語）、エストニア（エストニア語）、ハンガリー（マジャール語）⁷、ルーマニア（ルーマニア語）が挙げられる。

これらの①と②を広く含めることには、ひとつ利点がある。相互に関わりを持つ国や地域を、広範に見渡せることだ。これは本研究にとって重要な点である。「亡命知識人」は、おそらくこれら全ての国と地域から生まれたし、その多くはこれらの国と地域を渡り歩いたからだ。

本稿では、以上の領域を念頭に置いて「スラヴ地域」「スラヴ世界」という言葉を使うことにし

⁴ 以下に示すのは、多様な対象と方法を射程に収めるための便宜上の規定である。各研究者が一律に同じ規定を採用するわけではない。これら全ての国・地域からの亡命知識人を限なく探すわけでもない。概念や事例の選択は、それぞれの議論に委ねられる。

なお、本稿では「スラヴ」という語を用いるが、引用に際しては「スラブ」という表記をそのまま用いているところもある。

⁵ もとより地理的にも、文化的にも、さらに思想的にも「スラヴ」の範囲を特定することは困難である。ただ民族意識としてのスラヴ主義ということでは、ヘルダーがゲルマンに照応させる形でスラヴを規定したことは、たいへん示唆的である。彼がチェコを中心とするスラヴ主義の潮流を作ったといえるからである（川村、2009）。その意味では、後出のマサリクによる「ロシア援助計画」も、スラヴという同族意識に支えられていたという側面を持つ。

⁶ 『講座 スラブの世界』の編集委員会は、「スラブの世界とは、中部ヨーロッパから東北アジアにまたがる広大な地域」と述べている（原他、1996）。

⁷ フィンランド語、エストニア語、ハンガリー語そしてロシアの北西部で話されるコミ語などが、同じフィン・ウゴル系語族である。

たい⁸。

以上の規定を踏まえた上で、次の節では、サンクト・ペテルブルク⁹などの大都市を中心として花開いた19世紀ロシアの「知識人」思想を概観しておくことにする。

第2節 インテリゲンツィヤからナロードニキ、そしてエスエルへ

知識人というのは、一般には、何らかの意味で学問や体系的な知識を保持した人々を指している。語源の詮索については、すでにジェラが解決している（Gella ed., 1976）。もとより英語のインテレクチュアルズ（intellectuals）にしても、ドイツ語のインテリゲンツ（Intelligenz）、あるいはロシア語のインテリゲンツィヤ（интеллигенция）にしても、それぞれ異なったニュアンスを伴った意味を持っている。ただ共通しているのは、単に知識を保持したり、知識を教育や啓蒙に活用したりしているに留まらない、ということであろう。知識人は、おのれの持てる知識を、〈善く生きる〉ための実践活動に活かす。知識と実践との一致こそが、〈善く生きる〉ことにつながるのだ、と知識人が信じているからに他ならない。しかし他面、その実践的、社会的な活動によって、知識人は政治的な弾圧や排除を被った。それがために、亡命を余儀なくされることも、たびたび起こった。

なかでもここで取り上げたいのは、ロシアにおけるインテリゲンツィヤである。ロシアでは文芸評論家のベリンスキー（Виссарион Григорьевич Белинский, 1811-1848）が、この語を用いた早い事例に属する。ただ、1860年代に小説家のボボレイキン（Пётр Дмитриевич Боборыкин, 1836-1921）が、それを彼独自の意味を込めて広めたのが、この語の現代的な語義であるとされている。単なる「知的労働者」ではなく、「高邁な精神的、倫理的文化」の担い手であるとした。その知識の中身はどういったもので、その担い手は誰なのだろうか。

ロシアにおける知識とは、多くは、ヨーロッパ由来のものであった。ピョートル1世の時代（在位1682-1725）に、主として科学技術の導入から欧化政策は始まった。しかしナポレオンによるロシア遠征（1812年）により、ロシアの国民意識は高まり、スラヴ主義（Славянофильство）が声高に叫ばれるようになる。西欧とは違う、スラヴ独自の思想と文化とは何なのかが問われるようになった。そうした議論が、しだいに国粋主義の方に傾くようになると、今度はそれに対抗する形で、ロシアにおける西洋主義（Западничество）が形成される。

他方、出身階層を見ても、貴族のみならず、宗教家や農民を含む多種多様な人々が、インテリゲンツィヤに含まれている。ロシアのインテリゲンツィヤが雑階級人（разночинцы）であると言われるゆえんである。要するに西洋やロシアの知識に偏りがなく、また階級的伝統からも自由であるところに、ロシア特有の知識人のありかたが現れているといえるだろう。知識人が「批判的思考の持ち主」で、俗物主義（Мещанство）を嫌ったのは、そうしたロシア・インテリゲンツィヤの性格から来ているといえる（松原、2019）。

こうした性質を持ったインテリゲンツィヤは、農奴解放令（1861年）後、農村の発展と自立を願って、農村に分け入った。そのとき成立したのが、ナロードニキ運動（Народничество）である。だが文化的に「遅れた」農村住民を、「進んだ」都市生活者のレベルに引き上げるという発想にも限界があった。そうした自覚をもとに社会革命党（エスエル）は成立することになる。

第3節 社会理論の出発点

こうしたインテリゲンツィヤの土壌から生まれた産物の1つが、ロシア社会学である。早い時期にロシア社会学史の流れを描いたヘッ

⁸ 次のような範囲であると言い直すこともできよう。すなわち、北欧、中欧、東欧と呼ばれる地域のうち、ゲルマン系の言語を主として使用する地域（現在のオーストリアやドイツ）を除いた地域である。これは「スラヴ地域」の輪郭を示すための便宜的な説明であることに注意。

⁹ 周知のようにロシアの古都 サンクト・ペテルブルクは、1914年、第一次世界大戦の勃発とともに、ドイツ語風の呼称から、ペトログラードへと改称される。さらに1924年に、レーニンの名を冠したレニングラードに再改称されるも、1991年に、再び元のサンクト・ペテルブルクに戻された。本稿では煩を避けるために、サンクト・ペテルブルクないしペテルブルグと表記する。

カー（Julian Frederick Hecker, 1881-1938）やソーキン、その後の発展も踏まえて「ロシア社会学」をまとめたラゼルソン（Max Laserson, 1887-1951）は、19世紀後半に独自の発期があったことを示唆している（Hecker, 1915, 1934, Sorokin, 1926, 1927, Laserson, 1945）。この時期の諸学説は、ロシアだけでなく他のスラヴ地域の共通の遺産となっている。ここでは、そうした形成期のロシア社会学の特徴を見ておきたい。

19世紀後半のロシアの社会学は、ヨーロッパの思想・哲学の受容とその乗り越えによって発展した。特にスペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の社会有機体論および社会進化論、およびコント（Auguste Comte, 1798-1857）の学問分類と三段階の社会発展の法則が議論の中心にあった。コントは1830年から1842年にかけて『実証哲学講義』を、スペンサーは1862年から1892年にかけて『総合哲学体系』を、それぞれ完成させた。これに加えて、1893年に刊行されたデュルケームの『社会的分業論』が、19世紀後半のロシアにとっての最先端の社会学であった。

これら西洋の哲学や社会学を学びつつ、しかしロシア社会学は独自の展開を遂げたという一面を持っている。文字通り多種多様な学者を輩出したが、ここでは3つのキーワードとその3人の主唱者の名を挙げておきたい。すなわち主観派社会学（ミハイロフスキー）、相互扶助論（クロボトキン）、超有機体論（デロベルチ）である。これらのロシア社会学者たちが、自らの概念を作り上げていったのは、どのような理由からであろうか。彼らの生涯を簡単にたどりながら、その概念の社会学史的な意味について検討する。

(1)ニコライ・コンスタンティノヴィッチ・ミハイロフスキー

ミハイロフスキー（Николай Константинович Михайловский, 1842-1906）は1842年にカルーガ県メシチョフスクに生まれた。1906年にサンクト・ペテルブルクで没するまで、ロシアを出ることがなかった。彼の思想の特徴を一言で表すと、個人は自らの運命、生き方を主体的に選ぶことができるという点にある。主観派社会学と称されるゆえんである（Колосов, 1912）。系譜としてはラヴロフ（Пётр Лаврович Лавров, 1823-1900）の衣鉢を継ぐとされる。

つとに文芸評論家として有名であるが、社会学理論の書としては、『進歩とは何か』（1869年刊）

がある。これはコントとスペンサーの理論を解説するかたわら、社会進化の過程で生じるとされる「社会的分業（общественного разделения）」という現象に着眼し、人間社会における分業の問題点を抉り出した。

社会の発展の結果、分業が生じ、それによって資本主義社会は成立する。しかし分業は、人間が本来持っていたはずの能力・可能性の幅を、著しく制限してしまうという欠点を有している。極度に分業化した資本主義社会で、労働者は単純作業のスキルだけが求められるようになる。そこでは人間の多種多様な能力や資質など評価されるはずはなく、かえって無視される結果となる。ミハイロフスキーはそこに分業の問題点を見出した。

人間の価値というのはその全一性（цельность）にこそある。多様な潜在力を全面的に発揮してこそ、人間は幸福を獲得できる。しかしそのためには、資本主義体制下の「国民の幸福」という目標では不十分である。国民ではなく農民を中心とするナロード（Народ = 民衆）の共同体を完成させることを目指さなければならない、とミハイロフスキーはいう。ナロード共同体の成員である「ナロードの幸福」を考えなければならない。そしてその実現を目指すことが知識人（Интеллигенция）に課された役目であるとした。

ミハイロフスキーにとりナロードとは、勤労階級であり「現実的な個人」であった。これらの人々は全一性を保障された労働を担っていた。

ところで主観派社会学という場合の「主観」、という言葉には注意が必要である。これは何も客観的認識を放棄してしまうことではない。またのちの現象学的社会学のいう間主観性や、アメリカ社会学の自己論とも、性質を異にするものである。ロシア社会学における「主観」には、実は、次のような含意がある。

西洋資本主義社会の分業体制下におかれた人間（労働者）は、社会の一部として、あるいは部品として生きることを余儀なくされる。しかし裕福な資本家や貴族ならぬ人々は、それで



写真1：ミハイロフスキー

もその社会の片隅で生き延びていかなければならない。そこで人々は2つの生き方の選択を迫られることになる。その分業社会にうまく適応して生きるのか、それとも、もっと違う別の社会を模索するのか、である。言い換えるなら、ただ生きる

のか、それとも善く生きるのかの選択である。

多くの人々は、比較的安易な前者を選ぶことになる。しかしロシアには、分業社会とは違う生き方をしている共同体があった。それがナロードの共同体である。現にナロードが生きている共同体を範として構想された、善く生きるための社会、それを人々は選び取ることができるのではないか。そのために人々は、客観的に状況を分析し、認識する能力を身に付ける必要がある。客観的に得られた数ある可能性、選択肢の中から、人々はより善なるものを主体的に選び取ることができるし、また選び取らなければならない。そしてこの善なるものとは、人が自らの能力と資質を最大限に発揮すること、つまり人間が「全一的」な有機体として生きることである。これが主観派社会学の「主観」が持つ意味である(Михайловский, 1922)。

社会を構想するにはユートピアが必要である、とミハイロフスキーは述べている。そこには、善く生きることとは、アイデアに従って生きることであるというプラトンの思想がここに底流しているといえるだろう。日々の暮らしを良くしたいとか、他人より少し余裕のある暮らしがしたい、という発想とは全く違う社会構想であった。

(2)ピョートル・アレクセイヴィチ・クロボトキン

クロボトキン(Пётр Алексеевич Кропоткин, 1842-1921)は、1842年にモスクワで生まれた。サンクト・ペテルブルグの陸軍士官学校に入った後、農民およびフランス啓蒙思想に傾倒するようになる。学問的には、J・S・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)やゲルツェン(Александр Иванович Герцен, 1812-1870)やブルードン(Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865)といった思想家に興味を持つ。

1860年代に入ると、彼の時間の多くは、シベリアから満州にかけての地理学的調査に費やされた。そして1870年代より、ヨーロッパ社会との関わりが始まる。1872年にベルギーおよびスイスを訪ねる。この時期に彼は、第一次インターナショナルに関心を持ち、ギヨーム(James Guillaume, 1844-1916)を介してバクーニンの思想を知る。ロシアに戻ったクロボトキンは、秘密結社チャイコフスキー団(Чайковцы)に加わる。1874年には革命謀議の咎で逮捕されるも、獄中で健康を損ねたため、医療刑務所に移される。その医療刑務所を脱獄したクロボトキンは、1876年、フィンラ

ンド、スウェーデン、ノルウェーを転々とする。世界での政治運動に深く関与するようになってからは、たびたび逮捕されそうになるが、ついにフランスで捕まり1882年から1886年まで投獄される。

クロボトキンといえばアナキストを連想するが、実は、アナキストとしての活動期間はさほど長くはない。むしろ学者としての側面が強いといえるだろう。

クロボトキンの執筆活動が旺盛になるのは、1886年から1917年までのイギリス在住の時期である。むろんクロボトキンの主著は『相互扶助論』(1902)で、この著作は1890年から1896年にかけて雑誌『19世紀』に投稿された。「進化の要因としての相互援助」というのが初出のタイトルで、書籍としては1902年にロンドンとニューヨークで同時に出版された。

動物社会においても、人類社会においても、相互扶助をなした社会が生き残り、さらなる進歩を達成する。逆に内部において競争の絶えない社会(種族)は、退歩する傾向がある。さらに相互扶助型社会は、芸術、産業、科学の分野においても進歩が見られる。というのが『相互扶助論』の主張内容である。

クロボトキンによれば、社会集積体(social aggregate)は、人間であろうが動物であろうが、個体と他の個体、あるいは個体と集団との共同意識により作られている。この共同意識によりはぐくまれる相互扶助が、個体と集積体の生存の維持に役立っている。人々の持つその一体感は、全一性(oneness)ないし連帯(solidarity)の原則によって貫かれたものであり、人間に限らず生物から太陽系までの全宇宙にまで遍在している。人間が社会を作るのはこの「全一性」ないし連帯の意識による。「人間の連帯性と社会性の本能」である(Kropotkin, 1902: Introduction)。その意識に乏しい集団は、他の集団よりも劣っており、やがては生存競争に負けてしまう。

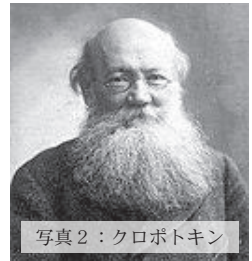


写真2：クロボトキン

この相互扶助型社会のありようを、動物から未開社会、さらには中世から現代の人間社会にいたるまでの豊富な実例でもって描き出したところに、『相互扶助論』の特徴は表れているといえるだろう。クロボトキン自身が序論で述べているように、その思想は同時代のギディングズの『社会学原理』¹⁰とも共有するものであった(クロボ

トキン、1970、263頁）。

1917年、クロボトキンは二月革命の後、ロシアに帰国することができた。出迎えたのは臨時政府の首相ケレンスキーであった。ボリシェヴィキの方針には終生反対であった。そしてついに1921年、モスクワの地で永眠することとなった。

(3) エフゲニー・ヴァレンティノヴィッチ・デロベルチ

デロベルチ (Евгений Валентинович Де Роберти = Eugène de Roberty, 1843-1915) は、1843年にポドリスク（現ウクライナのカームヤネツィ＝ポジーリシキイ）で裕福なスペイン系貴族の家に生まれた。ドイツのギーセン、ハイデルベルク、イエナ、およびフランスのパリといった各地の大学で学び、1864年、イエナ大学で中世ノヴゴロド共和国の社会政治構造に関する博士論文を出した。長らく夏はロシア、冬はフランスという二重生活を続けていたが、1915年トヴェリ県ヴァレンティノフカの自宅にて強盗に殺害されるという不幸に見舞われた (Verrier, 1934) ¹¹。

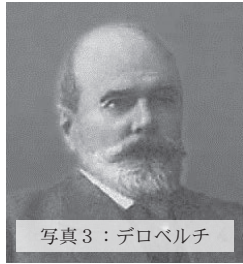


写真3：デロベルチ

ロシア国内においては、ラヴロフとダニレフスキー (Николай Яковлевич Данилевский, 1822-1885) に、コントの実証主義を紹介したことで知られている。ヴィルボフ (Григорий Николаевич Вырубов, 1843-1913) と一緒にロシア語訳した『実証哲学講義 (Курс положительной философии)』は、1867年にロシアで出版された。原書がフランスで完成されてから、25年後のことである。この時期に出版されたマルクスの『資本論』(1867年刊) は、デロベルチの目には留まっていなかったようである。経済学関連の著作としては、むしろ1850年代末にアメリカの経済学者ケアリー (Henry Charles

Carey 1793-1879) が発表した「社会科学の基礎」や「政治経済と社会科学」の方に興味を示している。デロベルチは、社会科学をケアリーのように交換の科学であるとするについて強く反対している。交換をもって社会と同一視することはできない、というのがデロベルチの立場である。ケアリーは社会を個人の単なる集合体だと考えているが、社会は個人の集合以上の存在である。このデロベルチの主張は、四半世紀の後にデュルケームが述べていることとも通底するものがある。

デロベルチにとって何より重要であったのは、社会的有機体の全体を研究することである。その有機体の一部分や、機能の1つを取り出して研究したところで、それは結局のところ、不確実と不安定を招くだけだとした (De Roberty, 1868)。さらに、そうした矮小化された研究視角は、一般性と完全性を見失わせることにもなるのだという。あくまでも存在の全体性（全一性）をとらえようとするロシア社会学の特徴の1つが、ここに表れているといえよう。

1880年代になるとデロベルチは、より精緻な理論を目指すようになり、社会学と生物学の接合を試みるようになった。ただし、ここでいう生物学とは、社会進化論や遺伝学などのことを指しているわけではない。むしろそれは神経心理学に近いものであった¹²。思考と感情が生まれる根源をつきとめるためには、この2つの科学の接合が、どうしても不可欠であった。脳の構造と認知のメカニズムは、個人の社会化のプロセスを理解するために、決定的に重要であるとデロベルチは考えていたからである。

こうしたデロベルチの主張する「新実証哲学」は、1880年代末、ロシア正教の教えに反するとして、ロシア国内では否定的にとらえられた。そのためもあってか、デロベルチの『過去の哲学』第2巻は検閲を受け、絶版処分となった。しかしロ

¹⁰ ギディングズの相互扶助に関する議論については (Giddings, 1896: 114-117) を参照のこと。

¹¹ 本節のデロベルチに関する記述は、ロシアの文献 (Семлалли, Рубанов, 2006) に依拠している。

またフランスでの紹介については、現在においてもルネ・ヴェリエ (René Verrier) の著作が最良のものとされている。なお同著者は、ソローキンの『現代社会学理論』のフランス語版 (*Les théories sociologiques contemporaines*) の訳者でもある。

¹² デロベルチの進化論への批判的立場は、例えばフランスのド・ラプージュ (Georges Vacher de Lapouge, 1854-1936) やドイツのオットー・アモン (Otto Ammon, 1842-1916) に対する否定的な態度にも表れている。

シアでは無きものとされた『社会学』および『過去の哲学』の大意は、彼自身の手によりフランス語に翻訳され、それぞれ1881年と1887年に出版された。その結果、彼の学説は、ロシアよりもむしろフランスの方で好意的に受け入れられた。

デロベルチはパリの社会科学自由学院 (Collège libre des sciences sociales) でも授業を行った。これと似たような、ロシアの国内事情によりパリでの研究教育活動を余儀なくされた学者としては、コヴァレフスキー (Максим Максимович Ковалевский, 1851-1916)、ヴィルボフ、ユデレフスキー (Яков Лазаревич Юделевский, 1868-1952)、ノヴィコフ (Яков Александрович Новиков, 1849-1912)、クロボトキンらがいる。

デロベルチはさらにブリュッセルの大学でも教えた¹³。そこで行われたデロベルチの一連の講義は、新著を準備するいい機会となった。道德哲学に関する講義が『倫理学——善と悪』に、1897年の講義が『社会心理』に、1898年の講義が『倫理原則』に、それぞれまとめられた。またパリ社会科学自由学院の講義が『倫理の構造』にまとめられた他、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) に捧げられた著作も書かれた。

1906年から1914年まで、彼はパリのヴァレンティノフカとサンクト・ペテルブルクを行き来した。夏はヴァレンティノフカで旺盛な執筆活動にいそしんだ。サンクト・ペテルブルクに初の社会学学科が心理神経研究学院内に設立され、彼はコヴァレフスキーとバクテレフ (Владимир Михайлович Бехтерев, 1857-1927) とともに授業を受け持った。ソローキンはちょうどこの時期に同学院に入学している。遺作『理性の概念と宇宙法則』(De Roberty, 1914) は、彼の知識社会学体系を最もよく表している。

人間の相互作用によってできる社会は、単なる物理的、あるいは生物的な有機体ではない。それとはまったく異なる性質をもっている。単なる人と人の集まりを越えた存在である。その意味で彼は社会を超有機的世界 (суперорганического мира) であると考えた。

第4節 スラヴ世界内外の展開

以上に見た3名の学説は、19世紀後半のロシアという、同じ時代の、同じ地域に生まれたわけだが、むしろ内容として同じ社会学思想を形成したわけではない。3名は、それぞれに独自の理論と活動を展開し、互いに異なる体系を築いた。

だが他方において、そうした多様な思想体系の中に、共通したものが全く見られない、というわけではない。例えば道德性や連帯や相互扶助の理論、共同体という社会構想、そして政治活動に関する実践性ということにかけては、むしろ互いに響き合っている部分が大いのではないだろうか。それらは、本研究のテーマである「利他主義等」の社会思想を準備したように思われる。彼らの努力の蓄積は、〈善く生きる〉ための社会学の基礎となるはずである。

これらの遺産は、どのような経路を通じて、多くの人に影響を与えたのだろうか。ここに特筆すべき点をいくつか挙げておきたい。

その1つは、彼らがスラヴ地域の研究機関で社会理論を講じたことである。研究機関での立場を得たことで、彼らは出版や直接の指導を通じて、比較的容易にロシア語による研究交流を可能にしたはずである。このことは、「社会思想」一般でなく、「社会科学」、「社会理論」、「社会学」等の専門的な探究の推進力ともなっている。

もう1つは、彼らの一部に亡命の経験がみられることである。一時的にせよ長期的にせよ、ロシアを追われた思想家たちはパリやロンドン、その他の地域で執筆を続けた。そうして世に問われた著述は、ヨーロッパの各地に残されている。このことは、その後、スラヴ地域の社会思想を広める際の、大きな足掛かりとなったのではないか。

ロシア語、フランス語、英語で書かれた専門書を、ポーランドやハンガリー、ブルガリアやバルカン地域¹⁴の知識人が摂取しないはずはない。19世紀後半から20世紀前半にかけては、各地の知識人が、思想と学問を形成した時期である。『20世紀の社会学』に所収の「ポーランド社会学」、「チェコスロヴァキア社会学」、「ルーマニア社会

¹³ だが同大学の学生 (Vaillant) がテロを起こすという事件があり、その結果、アナキストで教師であったエリゼ・ルクリュ (Elisée Reclus, 1830-1905) が責任を問われ、またデロベルチも連帯責任を負わされることとなった。同じ理由で、ヴァンダーヴェルデ (Émile Vandervelde, 1866-1938) やド・グレーフ (Guillaume De Greef, 1842-1924) も大学を去る。そして1899年に大学は閉校する。

学」、「ユーゴスラヴィアの社会学」を読むと、各地域の情勢の中で独自の社会学が試みられたことが分かる（Roucek 1945a, Znaniecki 1945, Manoil 1945, Roucek 1945b）。これらの展開において、初期のロシア社会学は何らの役割も果たさなかっただろうか。

管見の限り、以上のような点に関する知見を深めてくれるような体系的な研究は見あたらない。その一因は周知の通り、ロシア帝国の人文・社会科学が1917年のロシア革命以降、十分に継承されなかった事実求められよう（Titarenko and Zdravomyslova, 2017）。だがもう1つの要因は、スラヴ世界からの「亡命知識人」の歩みが十分に把握されなかった点にもあるのではないか。

このような考察から、初期のロシア社会学を出発点に据えて亡命知識人史を再考することが必要と考えられる。

第3章 亡命知識人史・再考

第1節 移動の形式

この章では、スラヴ世界の社会思想が、「知識人」の「亡命」を通じて西欧に広がっていく過程について考えてみたい。まずは先行研究の指摘に依拠しつつ、基本的な論点を整理しておくとしよう。

ロシア革命は、人々の移動を生み出した。この分野の第一人者によれば、それらは難民（refugee）、エミグレ（émigré）、亡命（exile）という3つに区別される。ただし、いずれか1つだけに当てはまるような例は稀である。人々は、2つか3つの形態を同時に経験した。そのため、これらを包含する「移住・移民（emigration）」の語も用いられる（Williams, 1997）。

人々の移動は、様々な背景が入り混じった現象だったのである。そこでまずは、1914年から1945年までの期間、スラヴ世界の内外にまたがって生

じた移動の全体像を捉えておく。

第一次世界大戦は多くの難民を生んだ。1914年から1917年までの間に住まいを失った人々は、ロシア帝国の範囲だけでも490万人以上（Gatrell, 1997: 554）。1917年から1921年にかけては、ロシア革命後の政変や戦争によって「数百万人」がこの地域をあとにした（Williams, 1997: 507）。もちろん、スラヴ世界はロシア帝国の外側にも広がる。それらの地からも、人々は難を逃れて脱出した。

亡命知識人は、これらの人々の一部だと言えるだろう。ただし、一般の人々とは異なる特徴もあった。それは、「学術・芸術の面で生産的なエミグレ」（Raeff, 1990: 7）だという点だ。その職業は詩人や小説家、演奏家や画家、出版人、作家、評論家、ジャーナリスト、さらには科学と工学の専門家、人文・社会科学の研究者、正教会の神父におよぶ。1920年代、この人たちはヨーロッパ各地でロシア文化を発展させた。

1930年代、遠くアメリカへと渡った人々の中にも同じく様々な分野の文化人がいた。この人たちは「知識人移民」（intellectual immigrants）などと呼ばれた。旧ロシア帝国の出身者はもちろんのこと、ハンガリーやポーランド、チェコスロヴァキアやルーマニアからも到来者がいた。この人たちはアメリカの学術・芸術を世界水準に押し上げた（Fermi, 1968=1972）。

スラヴ世界がこれほどまでに多くの亡命知識人を生み出したのはなぜだろうか。節を改めて、その原因を概観する。

第2節 スラヴ世界

(1)ロシア革命後のスラヴ世界

ここでは、1917年以降のロシア革命および各地域・各国の政治情勢を通じて、知識人たちが亡命を余儀なくされた経緯を整理する¹⁵。

¹⁴ セルビア・クロアチア語は、ロシア語と同じスラヴ語系の言語に属する。そうした言語的な近さもあって、ロシアの学問を吸収することは比較的容易であった。一例を挙げよう。社会学者ソローキンが1922年に亡命生活を送っていたチェコにおいて、ロシア語で書いたスラヴ農民を鼓舞する冊子『農本主義イデオロギー』がある。この小冊子が、日をおかずしてセルビア・クロアチア語に翻訳出版されている（Sorokin, 1924）。このことから、20世紀初頭におけるロシア語からセルビア語への翻訳の熱心さというものがうかがい知れるのではないだろうか。

¹⁵ 『新版 世界各国史』の各巻を参考にした。『ロシア史』（和田編、2002）、『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（伊藤他編、1998）、『ドナウ・ヨーロッパ史』（南塚編、1999）、『バルカン史』（柴編、1998）。各国の知識人の境遇の詳細は、今後、確かめたい。

1914年に第一次世界大戦が勃発すると、ロシア帝国は協商国の一員としてドイツやオーストリア＝ハンガリー、オスマン・トルコと交戦した。1917年、帝政に反対する勢力は、大衆と軍部を動員して二月革命を実現する。臨時政府の閣僚に座ったのは社会民主労働党の「メンシェヴィキ(меньшевики)」や「立憲民主党(通称カデット=кадеты)」の政治家や知識人だった。

これを不服とするレーニン(Владимир Ильич Ленин, 1870-1924)は、社会民主労働党の「ボリシェヴィキ(большевики)」を率いて政権を奪取。「ソヴィエト・ロシア共和国(Советская Российская Республика)」を建国する。これが十月革命である。1918年、ボリシェヴィキは「赤軍」を組織。同国は「ロシア・ソヴィエト社会主義連邦共和国(Российская Советская Федеративная Социалистическая Республика. 略称РСФСР)」となる。1919年、ボリシェヴィキは「共産党」を結成する。

だが、これだけでロシア革命が終わったわけではない。そのあとには、ロシアおよび周辺諸国における戦争と内戦、そして敗残者の掃討が続いた。地域ごとの事情によって状況は違ったが、どの地域からも、おびただしい数の亡命が生まれた。

まずは、新たに生まれたロシア・ソヴィエト内の情勢を見てみよう。1918年、ロシア内部の「反共」勢力が抵抗を開始する。帝国軍人や知識人が南ロシアを中心に「白軍」を組織し、モスクワ奪還を目指した。いわゆるロシア革命の「内戦」である。

これに乗じて、西欧諸国が「干渉戦争」を仕掛ける。支援を受けたロシア国内の被支配地域も、次々と独立を目指して、ロシア赤軍に「独立戦争」を挑む。以降、これらの戦争の勝敗が、各国の人々の境遇を大きく左右する。

この結果、赤軍は概ね17世紀来の帝国版図を維持した。それに加えて、新たに立ち上がったウクライナとベラルーシの共和国を武力で鎮圧。グルジア、アゼルバイジャン、アルメニアからなる「ザカフカス」をも支配下に置いた。これによって、白軍側の拠点は駆逐される。

1922年には、これら三地域に各々「社会主義ソヴィエト共和国」が建国される。さらに、これらの3か国とロシア・ソヴィエトからなる単一の中央集権国家が形成される。1924年、この国家は「ソヴィエト社会主義共和国連邦(Союз Советских Социалистических Республик. 略称

СССР)」を名乗る。「ソ連」の成立である。

1920年から1924年にかけて、白軍に加わらなかった知識人さえも国を追われることとなった。そのはじめりは政権転覆の「陰謀」疑惑だったとされる。以降、知識人が次々と処刑や追放の目にあう。この点については後述する。

1924年、レーニンが死去すると、共産党の内部でも抗争や弾圧が生じる。共産党員であっても、主流派でなければ命を狙われた。このことも知識人を国外に押し出す要因となった。

このように、ロシア・ソヴィエトおよび周辺の地域はソ連共産党の支配下に置かれた。しかし、その他の地域では、赤軍による干渉を免れるか、追い出した。これによって、スラヴ世界の各地に次々と独立国家が生まれた。

その中で唯一、共産党の体制が続くのはポーランドである。ポーランドは3つに分割されていたが、合併して共和国を建国する。そして1926年のクーデタにより共産党の一党独裁体制が敷かれた。これによってポーランドでも、ソ連と同じく、非共産党員は不安定な立場に置かれた。

その他の国々は、ポーランドのような体制にならなかった。バルト諸国では、リトアニアと、これに隣接するエストニア、ラトヴィアが、それぞれ独立を宣言する。同じくロシアに支配されていたフィンランドも、独立する。これらの国々は、ソ連との対抗上、「反共」の体制をとった。これらの国の共産党員は、処罰されるか追放された。

旧オーストリア帝国の支配地域からも、独立国が生まれた。第一次大戦の勃発前に独立していた国は、独立を維持した。当初これらの国の一部は、自由主義や社会主義の路線をとった。しかし全ての国が、1920年代を通じて保守化し、「反共」体制となる。大衆運動や民族運動さえ、弾圧された。これらの国は、帝政ロシアを支持する白軍や白系ロシア人の拠点となる。

ただし、新独立国のチェコスロヴァキアだけは例外だった。同国では、知識人の代表格ともいえる社会学者トマーシュ・ガリッグ・マサリク(Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937)が大統領に就任した。共産党員から帝政支持者まで、左右両翼の言論が認められた。様々な立場の亡命知識人が身を寄せる稀有な環境だった¹⁶。後述のように、プラハ等の主要都市には亡命知識人の足跡が残されることになる。

しかし、知識人亡命の物語はこれで終わらない。1920年代、チェコスロヴァキア以外のスラヴ

世界は、左右の全体主義に傾いた。この過程から生まれたのが、近代的な反ユダヤ主義である。知識人に占めるユダヤ系の割合は普通の人々よりも高い。それだけに迫害の影響は大きかった。

反動化したハンガリーでは、早くも1920年代にユダヤ系の知識人が公職の道を閉ざされた。この動きは1930年代を通じてドイツとオーストリア、イタリアとフランスに広がる。荒れ狂う反ユダヤ主義は、スラヴ世界の人々を再び亡命生活に押しやっていく。

このことは、大きく二つの点に現れた。まず、母国であれ亡命先であれ、スラヴ世界各国の大学等に勤めていた知識人らは、職を追われた。このため、スラヴ世界の他の国々、あるいはスラヴ世界の外部への脱出を余儀なくされる。

また、既にスラヴ世界を離れてベルリンやパリに逃れていた人たちも、ユダヤの出自であることを理由に罷免されたり、強制収容されたりした。逃げ場がなくなったことを知った知識人たちは、大挙してヨーロッパを離れた。

こうしたことから、ロシア革命の影響で亡命を経験した人たちも、そうでない人たちも、命を失うか、そうでなければ、第二、第三の亡命を余儀なくされたのである。

(2)スラヴ地域内外の移動

知識人の亡命遍歴は、地域によって、宗教的出自によって、そして思想と信条によって大きく異なる。ここではまず、スラヴ地域内外の移動について概観しよう。

祖国を離れる亡命者の多くは、まずは同じスラヴ世界にある他の国に逃れた。以降、その地にとどまる場合も、他の地に移る場合もある。一方、これとは対照的に、最初からスラヴ世界を離れる場合もあった。

ロシアを出て行った亡命知識人を考えるときに重要なのが、1922年5月に発表されたレーニンによる「知識人追放指令」(レーニン、1969、721頁)である。主として、ケレンスキーをはじめとする政府高官や主要な大学の知識人を追放することが目的であった。

死刑か追放かの二者択一を迫られた人々は、い

わゆる「哲学者の船 (Философский пароход)」に乗り込んで、ロシアを後にした。「哲学者の船」とは一種の比喻表現で、実際には、陸路と海路のルートがあった。亡命ロシア知識人の広がりを知るには、この「船」の行き先を知る必要がある(Деменок, 2014)。

まず船の運行についていうと、それは2つのルートで行われた。南部のオデッサ(現ウクライナ)からコンスタンティノーブル(現イスタンブール)へと向かうルートが1つ(1922年9月17日)。またオーベルブルグマイスター・ハーケン(Oberbürgermeister Haken)号(同年9月29～30日)とプロイセン号(同年11月16～17日)によるルートは、サンクト・ペテルブルクからステッティン(ドイツ)までであった。さらに陸路に目を移すと、汽車によるモスクワからベルリン(ドイツ)へ(同年9月23日)、あるいはモスクワからリガ(ラトビア)へ(同年9月23日)のルートがあった。

もちろん各人の事情により、船や汽車が到着したところに留まる場合もあれば、そこからさらに別の場所に拠点を移す人たちもいた。これにちなんで特にロシアの知識人にとって朗報だったのは、マサリクの尽力で実施された、チェコスロヴァキア政府による「ロシア援助計画(Ruská pomocná akce = Русская акция)」である。これは1920年代から1930年代にかけて大規模に行われた、教育の分野に重点が置かれていた支援活動である。彼らはロシア語による教育を受けることができた。ロシア人がロシア語を用いて研究、教育を行える大学・研究機関も作られたことで、プラハは一躍「ロシアのオックスフォード(ruský Oxford = Русский Оксфорд)」と呼ばれるようになった。また「ロシア援助計画」にはウクライナやベラルーシの出身者も含まれており、ウクライナ自由大学などが存在したのも、この時期である(Vidnyansky, 1996)。

プラハには生涯この地に定住したものもいたが、プラハからさらに次の場所へ拠点を移すものも少なくなかった。パリ、ロンドン、ベルリン、ローマ、ベルン、チューリッヒ、ウィーンは、多くのロシア人学者や芸術家たちをひきつけた。

¹⁶ 例えばモスクワ生まれの言語学者ロマーン・ヤコブソン(Roman Osipovich Jakobson, 1896-1982)は、1920年代にチェコで研究を続けていたが、ソ連のスパイである疑惑がかけられている(大平、2017)。

1920年代にパリやベルリンやプラハで、華やかな文化が花開いた要因の1つは、こうした亡命ロシア人たちの活躍があったからに他ならない。また東西ヨーロッパ各地のみならず、ロシア国内の政治亡命者の本拠地ナリム（Нарым）あるいは流刑地シベリアといった僻地、あるいはウラジオストク、満州といった極東、アジア方面の都市への移動も、決して例外ではなかった。

では、こうした亡命知識人の中には、いったいどういった人物が含まれていたのでしょうか。「哲学者の船」に限定して、その搭乗員を見てみよう。

1922年9月29日に就航した船オーベルブルガマイスター・ハーケン号は、ペテルブルグを出航し、9月30日にシュッティン（ドイツ）に到着した。この船には、モスクワとカザンを中心とする都市からの亡命者が乗っていた。

乗船リストの中には、ベルジャーエフ（Николай Александрович Бердяев, 1874-1948）、フランク（Семён Людвигович Франк, 1877-1950）、イリイン（Иван Александрович Ильин, 1883-1954）、トゥルベッコイ（Сергей Евгеньевич Трубецкой, 1890-1949）、ヴィシエスラーフツェフ（Борис Петрович Вышеславцев, 1877-1954）、キゼヴェッテル（Aleksandr Aleksandrovich Kizevetter, 1866-1933）、ミハイル・アンドレーエヴィッチ・オソルギン（Михаил Андреевич Осоргин, 1878-1942）、ノヴィコフ（Михаил Михайлович Новиков, 1876-1965）、ウグリモフ（Александр Александрович Угримов, 1906-1981）、ズヴォリキン（Владимир Васильевич Зворыкин, 1867-1943）、ツヴェトコフ（Н. А. Цветков）、バツカル（Илья Юрьевич Баккал, 1984-1950）といった人たちの名前が見られる。同人誌『道標（Вехи）』の一派が多数含まれていることが確認できよう。

2番目の「哲学者の船」プロイセン号は、1922年11月16日にペテルブルグを出航した。この船には、哲学者のロスキー（Николай Онуфриевич Лосский, 1870-1965）、カルサビン（Лев Платонович Карсавин, 1882-1952）、ラプシン（Иван Иванович Лапшин, 1870-1952）およびその家族らが乗っていた。ペテルブルグ大学の学者グループが利用したようである。

さらにこれとは別に、ウクライナの知識人の多くは、南のオデッサから対岸のコンスタンティノーブル（現イスタンブール）へと亡命した。その中には、歴史家フロロフスキー（Антоний

Васильевич Флоровский, 1884-1968）や生理学者バブキン（Борис Петрович Бабкин, 1877-1950）らが含まれている。

その他、ペテルブルグからシチェチン（ポーランド）へ向かう船に乗る人や、グルジアからベルリンに向かう人々もいたようである。

到着した先の国々でも、断続的に体制変動が生じた。ポーランドやハンガリーといった国々は、第一次大戦後に独立し、共和革命を経た後、クーデタによる政変が繰り返された。これらの政変は、当然ながら新たな亡命者を生み出す。

第二次大戦中、ロシアやドイツによって占領された国からも大量の亡命者が出た。戦後、独立と共産革命の過程でも亡命知識人が生み出されていく（Skovajsa et al., 2017: 42-3）。

第3節 他の国々へ

(1) フランス・ドイツ語圏への出入国

近年の研究は、ドイツ語圏とフランス語圏が亡命の受入地であり、中継地であったことを指摘している。それらの記述には、上に見たようなスラヴ地域からの亡命者が何人も現れる。加えてこれらの地域は、自らも亡命者を生み出すという複雑な地域であったことが指摘されている（Fleck, 2003, 2015, 2018）。

オーストリアでは、歴史的経緯からオーストリア＝ハンガリー帝国の旧版図であった地域を中心として、スラヴ地域から来た社会学者たちがいた。ただし、そのうちユダヤ系が少なくない点も留意すべきである。一例として、オーストリアのみならずドイツ語圏での第一世代の社会学者に数え入れられ、ドイツ語で始めてタイトルに「社会学」を冠した著者として知られているルートヴィヒ・グンプロヴィッツ（Ludwik Gumplowicz, 1838-1909）がいる。彼はオーストリア＝ハンガリー帝国下のクラクフ（現ポーランド）のユダヤ人家庭に生まれた。後にプロテスタントに改宗し、またポーランド独立運動に参加したこともあった。この独立運動に敗れたのち、グンプロヴィッツはグラーツ（現オーストリア）に移り、やがてグラーツ大学の法学部で教鞭を執った。

ドイツでは、ロシア帝国下のスタロコンスタンティノフでロシア系ユダヤ人の家族のもとに生まれた文化哲学者・社会学者のダーフィット・コイゲン（David Koigen, 1879-1933）がいる。彼は青年時代にオデッサで革命運動に参加し逮捕された後にパリに亡命し、その後スイス、ドイツへと

渡った。ベルン大学の哲学者・社会学者のルートヴィヒ・シュタイン (Ludwig Stein, 1859-1930) のもとで学位を取得したのち、ベルリン大学で私講師を務めている。当地ではゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) と同僚であり、またコイゲンが亡くなった際に追悼文を寄せることになるフェルディナント・テンニース (Ferdinand Tönnies, 1855-1936) とも交流があった。

ロシア二月革命の影響を受けてウクライナ人民共和国が成立した際にはキエフに渡り、キエフ大学で哲学と社会学の教鞭を執ったが、ボリシェヴィキによるウクライナ支配が完了すると、ふたたびベルリンに逃れている。1922年にはベルリンの「ロシア科学哲学協会 (Russischen Wissenschaftlich-Philosophischen Gesellschaft)」の副会長を務めている。

以上のような学者たちに加えて、とりわけ戦間期にドイツやオーストリアに移り、ナチス政権の成立やオーストリア併合のさなかに英米などに逃れていったスラヴ地域出身の社会学者たちが複数知られている (Fleck, 2018: 193-5)。

フランスでは、ロシア革命を契機に、科学史研究者のアレクサンドル・コイレ (Alexandre Koyré, 1892-1964) や哲学者のアレクサンドル・コジェーヴ (Alexandre Kojève, 1902-1968) がロシアからフランスへと移り住んだ。コジェーヴはドイツへの亡命を経てからのフランス移住である。

社会学者ジョルジュ・ギュルヴィッチ (Georges Gurvitch, 1894-1965) は、ロシア帝国下のノヴォロシースク (Новороссийск、現ロシア) に生まれ、ドイツとチェコを経てフランスに移住し、さらに第二次大戦中のニューヨーク亡命を経てフランスへ戻る。ニューヨーク亡命中に彼が所属していた亡命知識人の支援組織「自由高等研究院 (École libre des hautes études)」は、事務総長をコイレが務め、クロード・レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908-2009) もそこに所属していた。後者はそこでモスクワ出身の亡命知識人である前出のロマーン・ヤコブソンに出会う

が、この二人の出会いは構造主義を産み出すことになった。

ヤコブソンは後述のソローキンと同じ時期にブラハに滞在し、ハーヴァード大学にも同じ時期に所属していたが、ソローキンとは交流の跡が見られない。ヤコブソンと似た境遇にあった人物としては、上述のベルジャーエフ、ロスキー、ラプシンらが含まれる。

(2)他の国々：英米の救援活動等

スラヴ世界を離れた人々は、ドイツやフランスだけでなく、トルコやイタリア、中国やオーストラリアといった世界各国に身を寄せた。そうした様々な選択肢の中で、イギリスおよびアメリカに渡ったのはどのような人たちだろうか。

ドイツ語圏とフランス語圏に身を置いた亡命者のことはすでに瞥見した。その一部が後に英米へ転住したことも述べた通りである。そこでここでは、ドイツ語圏とフランス語圏には滞在しなかったか、短期間だけ留まった知識人を取り上げる。

参考として、1913年以前つまり第一次世界大戦前のことから始めよう。

この時期のイギリスには、クロボトキンからレーニンまで、名だたる亡命者が集まっていた。革命の勃発後、彼らはロシアに戻る¹⁷。

少数ながら、直接アメリカへ渡った人たちもいる。ロシアからは、後に述べる革命運動家のトロツキーが亡命していた¹⁸。

1914年以降は、亡命者の顔ぶれが大きく変わる。共産主義革命によって国を追われた知識人がロンドンに到来するからだ。

亡命者の中で有名なのは、カデットの政治家、V.D.ナボコフ (Набоков, Владимир Дмитриевич, 1869-1922) の一家だ。彼の子、ウラジミール・ナボコフ (Vladimir V. Nabokov, 1899-1977) は後に作家となる。1937年にパリへ、1940年にニューヨークへ転じ、この地で小説『ロリータ』を出版して成功した。1957年にはスイスに移る。

サンクト・ペテルブルク大学で古代史を担当し

¹⁷ クラクフ生まれのマリノフスキも、同時期の渡英者だ (Bronisław Malinowski, 1884-1942)。1910年、ドイツを経てロンドンに留学。機能主義の文化人類学を築き、教鞭をとった。1939年に渡米。

¹⁸ ポーランドからの移民に民族運動を呼び掛ける遊説者がいた。また、一般の移民としてはゴールデンワイザーがいる (Alexander Aleksandrovich Goldenweiser, 1880-1940)。キエフに生まれ、1900年、一家でニューヨークに移住。ボアズ派の人類学者となった (Kan, 2009)。

ていたキエフ出身の歴史家ミハイル・ロストフツェフ (Michael I. Rostovtzeff, 1870-1952) は、1918年、ストックホルムからパリを経て、オックスフォードに辿り着いた。1920年には米国に移る。革命後にイギリスからアメリカに渡った最も初期の人物だ (Raeff, 1990)。

一方、この時期に直接アメリカへ渡った亡命者は少ない。その一人が、先述の社会学者ソローキン (Пити́ри́м Алекса́ндрович Соро́кин, 1889-1968) だ。彼はロシアの北部 (現在のコミ共和国) に生まれ、サンクト・ペテルブルク大学で教授となった。1922年、プラハに亡命。1924年、アメリカに渡る。ハーヴァード大学の社会学部を率い、利他主義の学説を展開した。

1930年代のヨーロッパの情勢は、ドイツのナチス党の勢力拡大によって激変する。周辺国への侵攻と反ユダヤ主義の諸施策によって、スラヴ地域出身のユダヤ系知識人にも身の危険が迫った。それによりイギリスとアメリカへの渡航は急増する。

イギリスでは、全国的な救援活動が行われた。その一例は、1933年に創立された「大学人援護協会 (Academic Assistance Council)」である。救出すべき中東欧の大学人たちの情報を与えたのはハンガリー出身の物理学者レオ・シラード (Leo Szilard, 1898-1964) だという。

アメリカの特徴は、研究機関の受け皿を用意した点にあった。そのため、著名なヨーロッパの研究者たちが、次々と押し寄せた (鈴木、2003)。

プリンストン大学は1930年、「高等学術研究所 (Institute for Advanced Study)」を設置。以降、亡命ヨーロッパ人を多く雇用した。その中に、スラヴ世界の出身者たちが混ざっていた (先述のコイレなど)。

ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチは1933年5月、「亡命者大学 (The University in Exile)」を設置。社会・政治科学の大学院と位置づけ、ドイツ語圏の研究者を招いた。この中にもスラヴ世界の出身者が含まれていた¹⁹。

ニュースクールは、フランス降伏後の1942年、先述の「自由高等研究院」を設置。ここではパリから転じたギュルヴィッチ、ヤコブソン、コイレらが教えた。同大学は、フランス戦時政府認定の

学位を出した (紀平、2017)。

スラヴ地域から直接アメリカへ渡った知識人もわずかに認められる。ロシアから亡命した物理学者のガモフ (George Gamow, 1904-1968) や、ハンガリーからの亡命作曲家バルトーク (Bartók Béla Viktor János, 1881-1945) などである (Fermi, 1968=1972)。

なお、アメリカは共産党員を受け入れなかった。左派の知識人の多くは、アジア諸国やラテンアメリカに逃れた。ソ連を建国した立役者のトロツキー (Лев Давидович Троцкий, 1879-1940) は、その後、トルコやスウェーデンに亡命し、メキシコで暗殺者の銃弾に倒れた。

大戦が終結すると、今度は冷戦が始まった。左派の言論人たちは、革命後の東欧へと向かった。しかし、スラヴ世界の出身者の多くは祖国に戻れなかった。避難した先の国で終の棲家を得た人や、フランスやスイスへ転住した人など、身の振り方は様々であった。

第4節 社会学者の亡命史

(1) 複数地域から見えてくる亡命史

このように世界各国を見渡してその歩みを辿ると、亡命知識人の裾野の広さが浮かび上がる。ここでは、今後このような探究の先に指摘しよう。

1つは、「亡命社会 (society in exile)」のネットワーク性である。これまで、多くの文献が「在外ロシア (Заграничная Россия = Russia Abroad)」について記してきた。だが、それらの文献に現れるのは各国の各都市に現れた「ロシア人社会」ばかりである。しかし、いくつかの都市にまたがって活躍した亡命知識人の足跡から、新たなネットワークが解明されてはこなかった。彼らは亡命先の社会に適応し、文化を享受したに留まったのだろうか。そうではないだろう。

1848年革命の研究にヒントを探ろう。中東欧の革命に敗れて祖国を追われた人たちは、大挙してドイツからフランス、そしてイギリス、アメリカへと渡った。彼らは、次のように亡命先でも活動を続けたのだという。

¹⁹ たとえば、最初に雇用されたのはピルゼン (現チェコ) 出身の経済学者レーデラー (Emil Lederer, 1882-1939) である。

1848年革命が残したものは、むしろアメリカやイギリスに亡命した者の中にあった。彼らは敗北後も、ヨーロッパの革命を期待し、ヨーロッパ民主中央委員会や第一インターナショナルのように、国を超えた連帯を図っていたからである。(的場、1998a: vi)

それらは「革命家相互のネットワーク」、あるいは「亡命者ネットワーク」と呼びうるものであろう(的場、1998b: 6-7)。

在外ロシアにも同じような越境的ネットワークは見られたのではないだろうか。もとより、1848年の亡命者は革命の担い手である。「反革命」の側に立った1917年の亡命者たちとは立場が違う。しかし、ブルガリアやユーゴスラビアに拠点を構えた白軍の残党が協力し合ったのは有名な事実だ。パリやチェコのロシア文学者や哲学者は、互いの作品を読みあったという。

今見てきたプラハやウィーン、パリやニューヨークには、それぞれ、主要な人文・社会科学の研究者が滞在していたし、なによりロシア人のための大学さえもが存在していた。社会学や周辺分野の研究者たちが国境を越えてつながっていても不思議はない。そうした交流を通じて生まれ、国際的に育っていくようなネットワークはなかっただろうか。

もう1つは、それぞれの知識人のその後の歩みである。「亡命社会」としての在外ロシアは、1939年のドイツ軍の各地侵略によって解体されたとされる。たとえば、ドイツ軍によってフランスが占領されると、パリの亡命者たちは拠点を失ったからだ(Raeff, 1990: 7)。だが、一人ひとりの知識人について言うならば、1940年以降も、居場所を転々としながら研究や言論は続けられた。知識人たちは、各国での放浪生活を経験しながら、後世に残せるような社会思想を生み出さなかっただろうか。

1940年にいたるまでの度重なる苦難は、社会学者たちの中に、社会に対する洞察と、新たな社会構想を生み出したに違いない。そうした思想家の中から、期せずして複数の都市で、〈善く生きる〉ための社会学の必要性が指摘されるといった展開は見られるのではないだろうか。

本研究会では各メンバーがいずれかの地域を担当して、人文・社会科学の領域で活躍した思想家の足跡をあとづけていく。その作業によって、こ

こに指摘した事柄を確認していきたい。

(2) 〈善く生きる〉ための社会学

これらの事例を通じて素描されるのは、おそらく次のような社会思想史の筋書きである。

19世紀後半のスラヴ地域は、20世紀前半を通じて、より彫塑された社会理論と社会実践を生み出した。こうした人文・社会科学分野の諸思想は、戦争や革命を機として、亡命知識人の手によって広められ、チェコをはじめとするスラヴ世界の人々に受け入れられた。これがひいては、最終の生活拠点を定めたヨーロッパやアメリカの知的伝統に対して1つの問題提起を生み出すことになる。

すなわち、スラヴ地域には、1870年頃から1960年頃までに形成された西欧の主潮流とは独立した思想の系譜が見られた。ポーランドのペトラジツキー(Лев Иосифович Петражицкий, 1867-1931)、ズナニエツキ(Florian Witold Znaniecki, 1882-1958)、バウマン(Zygmunt Bauman, 1925-2017)や、あるいは現チェコのプロスチェヨフ(Prostějov)で生まれたフッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859-1938)といった名前をあげるまでもなく、ある意味ではユニークな思想、理論、活動の体系が生み出された。それらは、必ずしも傑出した一人の思想家の手によってもたらされたわけではない。むしろ、西洋から見ると辺境の地にあった多くの思想家たちの、知の営みの中から立ち現れ、世界の亡命知識人のネットワークによって広まっていったものだ、と言った方がよいであろう。

その思想史の流れを本研究の言葉で端的に言い直すとするならば、ソーマ的(肉体的)なものをことごとく振り払うことで、本質を直観するという発想、純粋なアイデアの世界を看破するプシュケー(魂)の社会学を構築しようとする試みだった、ということになる。それは苦難に満ちた社会において、なおも善なるもの、幸福であることを諦めないための思索の跡であった。このような遺産が、亡命知識人たちの経験を通じて、西欧世界に広められたものなのではないだろうか。

第4章 深めるべき論点

本稿の冒頭で述べたように、本研究の関心の焦点は、社会学および関連分野の研究が、いかようにして人々の生き方をより豊かで、より善いものにするのか、ということにある。現時点では、次のような論点が考えられる。

a. 現実社会に関わる方法

——「利他主義等」の実現を目指す社会科学のありかたとしては、どのようなものが考えられるだろうか？

b. 学識者と一般人の関係性

——「利他主義等」を実現しようとする学識者の成果に対して、一般の受容者（読者など）は、どのように反応するだろうか？

c. 自由が公共と折り合う筋道

——「善く生きている」と感じている個人は、自身の趣味嗜好を楽しみながら現代社会を暮らす（陽気なロボット）。この人たちは、善き世界を生み出すことにも関われるのだろうか（公共善を生み、担う活動）。

d. ある道徳と他の道徳の対話

——善き生、善き世の中は、それと異なるような善き生、善き世の中とは対立するだろう。このときに、善き生、善き世の中の原理は、人々が対立を乗り越えることを可能にするだろうか？

本研究の関心は上述の亡命知識人たちの遺産にある。チェコやオーストリア、ドイツやフランスを経て、イギリスやアメリカに身を置いたスラヴ地域出身の知識人も、同じような問題に悩み、答えを模索したはずである。そうした経験をつまびらかにすることが第一義的な課題である。

ひるがえって、それらの足跡から何かしらヒントを得て、〈善く生きる〉ための社会学の筋道を描けるか、どうか。これは今後の研究の進捗にかかっている。

むすび

本研究プロジェクトは、以上のような共通の視点を掲げる。しかし個々の事例については、それぞれの関心に沿った研究を進めるのが適している。それぞれが全く異なるアプローチ、目標を持って進めた研究は、結果的に、以上のような論点を深めるはずだ。

本研究会の活動は、2019年から2023年までの5年計画で進められる予定である。具体的な調査研究は、メンバーそれぞれの研究を通じて世に問われるだろう。研究会の場では、メンバー間での討論も行う。折に触れて、そうした成果を紹介していきたい。

■写真の出典

“Nikolay Mikhaylovsky,” Wikipedia (en.) = 写真1

“Peter Kropotkin,” Wikipedia (en.) = 写真2

“Де Роберти, Евгений Валентинович,” Wikipedia (ru.) = 写真3

■参考文献（欧文献）

Ashton, Rosemary, 1986, *Little Germany*, Oxford University Press. =2001, 的場昭弘監訳『ロンドンのドイツ人——ヴィクトリア期の英国におけるドイツ人亡命者たち』御茶の水書房。

Coser, Lewis A., 1984, *Refugee Scholars in America: Their Impact and Their Experiences*, New Haven: Yale University Press. =1988, 荒川幾男訳『亡命知識人とアメリカ——その影響とその経験』岩波書店。

Деменов, “Одесские, пассажиры философского парохода,” *АЛЬМАНАХ*, No. 52, С. 2013, 91-112.

De Roberty E., 1868, *L'économie politique et la science sociale*, Paris.

De Roberty E., 1869, Некоторые законы политической экономии, Он же. Политико-экономические этюды, С. 82-83.

De Roberty E., 1914, *Понятия разума и законы вселенной*, Пг.: Издание Студенческого Общества потребителей Петербургского психоневрологического института.

Fermi, Laura, 1968, *Illustrious Immigrants: The Intellectual Migration from Europe 1930-1941*, Chicago: University of Chicago Press. = 1972, 掛川トミ子・野水瑞穂訳『二十世紀の民族移動1・2（亡命の現代史1・2）』みすず書房。

Filoni, Marco, 2020, *Le Philosophe du dimanche: la vie et la pensée d'Alexandre Kojève*, Paris: Gallimard.

Fleck, Christian, 2003, “Soziologie und Exilforschung,” Evelyn Adunka und Peter Roessler (Hg.), *Die Rezeption des Exils. Geschichte und Perspektiven der österreichischen Exilforschung*, Wien: Mandelbaum, 177-186.

Fleck, Christian, 2016, *Sociology in Austria*, Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan.

Fleck, Christian, 2018, “Intellektuelle Exilanten in Österreich: österreichische Sozialwissenschaftler im Exil,” Stephan Moebius und Andrea Ploder (Hg.), *Handbuch*

- Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Band 1: *Geschichte der Soziologie im deutschsprachigen Raum*, Wiesbaden: Springer VS, 189–206.
- Jeffries, V. ed., 2014, *The Palgrave Handbook of Altruism, Morality, and Social Solidarity: Formulating a Field of Study*, Palgrave Macmillan.
- Gatrell, Peter, 1997, “Refugees in the Russian Empire, 1914–1917: Population Displacement and Social Identity,” Edward Acton et al. (eds.), *Critical Companion to the Russian Revolution 1914–1921*, London: Arnold, 554–564.
- Gella, Aleksander, (ed.), 1976, *The Intelligentsia and the Intellectuals: Theory, Method and Case Study*, Beverly Hills: Sage.
- Gousseff, Catherine, 2008, *L'Exil russe: La fabrique du réfugié apatride (1920–1939)*, Paris: CNRS éditions.
- Giddings, Franklin H., 1896, *The Principles of Sociology: An Analysis of the Phenomena of Association and of Social Organization*, The Macmillan company.
- Gumplowicz, Ludwig, 1883, *Der Rassenkampf: sociologische Untersuchungen*, Innsbruck: Wagner'schen Universitätsbuchhandlung.
- Harold, Daniel, 2015, “Russian Exiles in Britain, 1918–1926: The Politics and Culture of Russia Abroad,” Dissertation of BA (Hons) History, Department of Humanities, Northumbria University (<https://www.northumbria.ac.uk/media/7245181/daniel-harold-russian-exiles-in-britain.pdf>)
- Hopkins, Charles Howard, 1940, *The Rise of Social Gospel in American Protestantism 1865–1915*, New Haven: Yale University Press. = 1979, 宇賀博訳『社会福音運動の研究』恒星社厚生閣.
- Hughes, H. Stuart, 1958, *Consciousness and Society: The Reorientation of European Social Thought, 1890–1930*, New York: Knopf. = 1965, 生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会——ヨーロッパ社会思想史』みすず書房.
- Hughes, H. Stuart, 1968, *The Obstructed Path: French Social Thought in the Years of Desperation, 1830–1960*, New York: Harper & Row. = 1970, 荒川幾男・生松敬三訳『ふさがれた道——失意の時代のフランス社会思想 1930–1960』みすず書房.
- Hughes, H. Stuart, 1975, *The Sea Change: The Migration of Social Thought, 1930–1965*, New York: Harper & Row. = 1978, 荒川幾男・生松敬三訳『大変貌——社会思想の大移動 1930–1965』みすず書房.
- Hecker, Julius F., 1915, *Russian Sociology: A Contribution to the History of Sociological Thought and Theory*, London: Chapman & Hall. = 1927、波多野鼎訳『ロシア社会学』聚英閣. Revised, 1934, *Russian Sociology: A Contribution to the History of Sociological Thought and Theory*, London: Chapman & Hall.
- Jeffries, Vincent, 2014, “Altruism, Morality, and Social Solidarity as a Field of Study,” Vincent Jefferies (ed.), 2014, *Palgrave Handbook of Altruism, Morality, and Social Solidarity: Formulating a Field of Study*. Palgrave.
- Jeffries, Vincent, (ed.), 2014, *Palgrave Handbook of Altruism, Morality, and Social Solidarity: Formulating a Field of Study*. Palgrave.
- Johnston, Robert H., 1988, *New Mecca, New Babylon: Paris and the Russian Exiles, 1920–1945*, Montreal: McGill-University Press.
- Kan, Sergei A., 2009, “Alexander Goldenweiser’s Politics,” *Histories of Anthropology Annual*, Vol.5, 182–199.
- Koigen, David, 1929, *Der Aufbau der sozialen Welt im Zeitalter der Wissenschaft: Umriss einer soziologischen Strukturlehre*, Berlin: Carl Heymanns Verlag.
- Колосов, Е.Е., 1912, *Очерки мировоззрения Н. К. Михайловского. Теория разделения труда как основа научной социологии*.
- Kropotkin, Peter, 1902, *Mutual Aid: A Factor of Evolution*, New York: McClure Phillips. = 1907, *Взаимная помощь как фактор эволюции*, СПб.: Изд. т-ва “Знание” = 1970, 『反逆者の言葉、相互扶助論』（アナキズム叢書 クロボトキン I）三一書房.
- Lee, Matthew T., 2014, “The Essential Interconnections among Altruism, Morality, and Social Solidarity: The Case of Religious Altruism,” 311–331. In V. Jeffries (ed.) 2014.
- Love, Jeff, 2018, *The Black Circle : a Life of Alexandre Kojève*, New York: Columbia University Press.
- Loyer, Emmanuelle, 2005, *Paris à New York:*

- intellectuels et artistes français en exil (1940-1947)*, Paris: Grasset.
- Manoil 1945, "Rumanian Sociology," in: Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore (eds.), *Twentieth Century Sociology*, 732-740.
- Mehlman, Jeffrey, 2000, *Emigré New York: French Intellectuals in Wartime Manhattan, 1940-1944*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Михайловский, Николай К., 1922, *Что такое прогресс?* Пг.: Колос. =1994, 石川郁男訳『進歩とは何か』成文社.
- Mucchielli, Laurent, 1998, *La découverte du social: naissance de la sociologie en France, 1870-1914*, Paris, La Découverte, coll. «Textes à l'appui».
- Nethercott, Frances, 2000, *Russia's Plato: Plato and the Platonic Tradition in Russian Education, Science and Ideology (1840-1930)*, Ashgate Publishing Limited.
- Разумник, Васильевич Иванов-Разумник, 1911, *История русской общественной мысли. Индивидуализм и мещанство в русской литературе и жизни XIX в.* =2013, 佐野努・佐野洋子訳『ロシア社会思想史——インテリゲンツィヤによる個人主義のための闘い 上・下』成文社.
- Raeff, Marc 1990, *Russia Abroad: A Cultural History of the Russian Emigration, 1919-1939*, Oxford University Press.
- Roucek, Joseph S., 1945a, Czechoslovak Sociology, in: Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore (eds.), *Twentieth Century Sociology*, 717-731.
- Roucek, Joseph S., 1945b, Sociology in Yugoslavia, in: Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore (eds.), *Twentieth Century Sociology*, 740-751.
- Sandstrom, Gregory, 2008, "Global Sociology: Russian Style," *The Canadian Journal of Sociology*, 33 (3) : 607-629.
- Schlögel, Karl, 2018, *Russische Emigration in Deutschland 1918 bis 1941: Leben im europäischen Bürgerkrieg*, De Gruyter.
- Семлалю Ю., Рубанов Б. Л., 2006, "Штрихи к биографии и социологической доктрине Е.В. Де-Роберти," *Социологические исследования*, No. 8, С.139-148.
- Skovajsa, Marek and Jan Balon, 2017, *Sociology in the Czech Republic: Between East and West*, London: Palgrave Macmillan.
- Slatter, John, (ed.) , 1984, *From the other shore: Russian political emigrants in Britain, 1880-1917*, London, England: F. Cass.
- Sombart, Werner, 1923, "Die Anfänge der Soziologie," Melchior Palyi (ed.), *Erinnerungsgabe von Max Weber*, 1. Band, *Hauptprobleme der Soziologie*, München und Leipzig: Duncker & Humblot, 1-19.
- Sorokin, Pitirim. A., 1924, *Ideologija agrarizma*, Zagreb: Biblioteka Društvo.
- Sorokin, Pitirim A., 1927, "Russian sociology in the twentieth century," *American Journal of Sociology* 21: 57-69. =1932, 「第二十世紀に於けるロシア社会学」松本潤一郎編『社会学——学説と展望』浅野書店, 224-250.
- Titarenko, Larissa, and Elena Zdravomyslova, 2017, *Sociology in Russia: A Brief History*, Palgrave Macmillan.
- Uzlaner, Dmitry, 2018, "The Legacy of Pitirim Sorokin in the Transnational Alliances of Moral Conservatives," *Journal of Classical Sociology*, 18 (2) : 133-153.
- Verrier, R., 1934, *Roberty: Le positivisme russe et la fondation de la sociologie*, Paris: Alcan.
- Vidnyansky, Stepan, 1996, "Ukraine and the Ukrainian Question in Czechoslovak Policy," in *Ukrainian Statehood in the Twentieth Century: Historical and Political Analysis*, Kyiv: Political Thought, 171-191.
- Vucinich, Alexander, 1976, *Social Thought in Tsarist Russia: The Quest for a General Science of Society, 1861-1917*, University of Chicago Press.
- Williams, Robert C., 1997, "The Emigration," in Edward Acton et al. (eds.), *Critical Companion to the Russian Revolution 1914-1921*, London: Arnold, 507-514.
- Znaniacki, Eileen Markley, 1945, Polish Sociology, in: Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore (eds.), *Twentieth Century Sociology*, 703-717.
- Zytnicki, Colette, (ed.), 2010, *Terre d'exil, terre d'asile : Migrations juives en France aux XIXe et XXe siècles*, Paris: Éditions de l'Éclat.

■参考文献（和文献）

- 諫早勇一、2014、『ロシア人たちのベルリン——革命と大量亡命の時代』東洋書店。
- 石川郁男、1994、「解説」、Михайловский, 1922=1994 所収。
- 石川晃弘編、1994、『スラヴの社会』弘文堂。
- 石川晃弘、2020、「中欧諸国民のロシア観——最近の世論調査結果から」『紀要：社会学・社会情報学、中央大学文学部』、30: 1-14。
- 伊東孝之、井内敏夫、中井和夫編、1998、『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社。
- 岩田靖夫、1985、『アリストテレスの倫理思想』岩波書店。
- 宇賀博、1971『社会学的ロマン主義——アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣。
- 大平陽一、2017、「ヤコブソンと年上の友人たち」『東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』、32: 61-72。
- 大澤武男、1991、『ユダヤ人とドイツ』講談社。
- 川村清夫、2009、『プラハとモスクワのスラヴ会議』中央公論事業出版。
- 紀平英作、2017、『ニュースクール——二〇世紀アメリカのしなやかな反骨者たち』岩波書店。
- 坂庭淳史、2006、「キレーエフスキーとシェリング、プラトン全一性をめぐって」『プラトンとロシアⅢ』「スラヴ・ユーラシア学の構築」研究報告集、No.25、60-80。
- 柴宜弘編、1998、『バルカン史』山川出版社。
- 下里俊行、2008、「1850年代のロシアにおける正教的プラトン理解」『プラトンとロシアⅢ』「スラヴ・ユーラシア学の構築」研究報告集、No.25、17-59。
- 鈴木輝二、2003、『ユダヤ・エリート——アメリカへ渡った東方ユダヤ人』中央公論新社。
- 原暉之・伊東孝之・木村汎・皆川修吾・望月哲男、1996、「刊行のことば」、川端香男里・中村喜和・望月哲男編『スラヴの文化』（講座スラヴの世界 第1巻）。
- 藤沢令夫、2000、『イデアと世界』（著作集第2巻）岩波書店。
- 松原広志、2019、『ロシア・インテリゲンツィヤの運命——イヴァーノフ＝ラズムニクと20世紀前半ロシア』成文社。
- 的場昭弘、1998a、「まえがき」、的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』御茶の水書房、i-xii。
- 的場昭弘、1998b、「1848年革命の精神と革命家——アメリカとイギリスのドイツ人コロニーを中心として」、的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』御茶の水書房、5-36。
- 南塚信吾編、2002、『ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社。
- 矢澤修次郎、1996、『アメリカ知識人の思想——ニューヨーク社会学者の群像』東京大学出版会。
- 吉野浩司、2020、『利他主義社会学の創造——P. A. ソローキン最後の挑戦』昭和堂。
- レーニン、1969、『レーニン全集 第45巻』、大月書房。
- 和田春樹編、2002、『ロシア史』山川出版社。